

## 竈形土器の展開－岡山県の事例から－

亀 山 行 雄

### 1 はじめに

竈で炊ぐ飯の香は遠い過去の記憶となった。電気炊飯器や電磁調理器が普及した現在では、炊事に火を使うこと自体まれになりつつある。しかし、炊事専用の施設として朝鮮半島から伝えられた竈は、日本人の生活文化の基層を形作る上で少なからぬ役割を果たしてきた。

岡山県におけるこうした竈の考古学的研究は、1971年の中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査に始まる（文献7）。その後、山陽自動車道、苦田ダム、国道180号バイパスなどの大規模開発に伴う調査で得られた膨大な資料をもとに様々な検討が加えられてきた（文献16・26・33・37）。

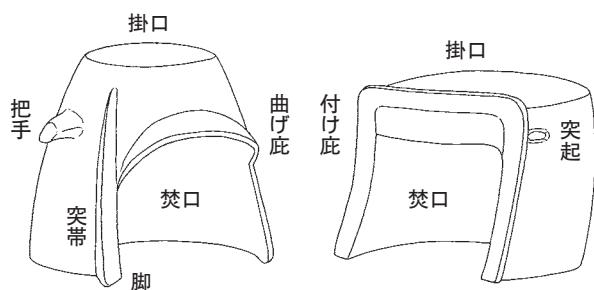
しかし、竈形土器<sup>(1)</sup>については全形を留める例が少ないこともあって、これまで取上げられることも少なかつた。そこで本稿では、県内出土の竈形土器を集成して、その様相を概観する。

### 2 竈形土器の分布と変遷

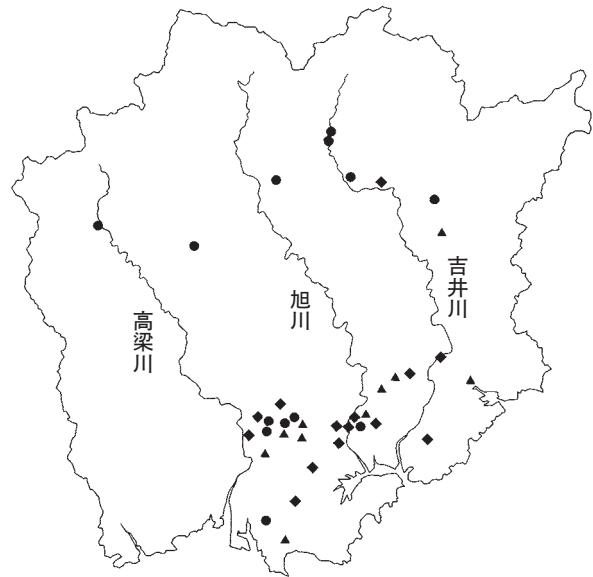
#### 1期（6世紀中葉～7世紀前半）

瀬戸内海に面した岡山県南部では、旭川下流域の岡山平野や高梁川（足守川）下流域の総社・高松平野を中心に9遺跡33点の竈形土器が見つかっている（第2図）。

今のところ5世紀までさかのぼる確かな例は知られていないが、足守川流域にある岡山市高松原古才遺跡では格子目叩きを残す竈形土器の破片が出土していて（文献23）、朝鮮半島系土器との関連が指摘されている<sup>(2)</sup>。現在、県内で確認されている最も古い竈形土器は、高松原



第1図 竈形土器模式図



第2図 竈形土器の分布（1期● 2期▲ 3期◆）

古才遺跡の西約7kmに営まれた岡山市津寺遺跡のものである。6世紀中葉（TK10型式期）の竪穴住居から出土したこの竈形土器（第3図1）は、焚口周辺を欠いており庇や把手の有無は明らかではないが、円筒形の体部から外反して開く掛け口を持つ。掛け口が外反する竈形土器は島根県や鳥取県西部（文献4・51）、広島県（文献57・67・69）で多く知られており、これらの地域に近い高梁川の下流域に、津寺遺跡のほか総社市三須河原遺跡（文献27）、倉敷市広江・浜遺跡（文献53・54）と類例がまとまっている点は注意される。鍛冶集落として知られる総社市窪木薬師遺跡では、6世紀後半（TK43型式期）の竪穴住居から竈形土器（第3図2）が出土している。低いドーム形に復元され、焚口の周りに板状の庇を貼り付けている。7世紀前半（TK217型式期）を下限とする溝から出土した岡山市原尾島遺跡の竈形土器（第3図4）は、焚口上縁にのみ庇を貼り付ける。側面に穿たれた径約3cmの円孔には把手が挿入された痕跡は認められず、把持孔の可能性がある。津寺遺跡北西の護岸施設から見つかった6世紀後半の竈形土器（第3図3）は、焚口上部を前方に折り曲げた曲げ庇で、側面に把手を貼り付けた痕を残す。基部を失っているが、焚口の内側には脚を貼り付けた粘土帯が認められる。斜め上方に拡張し

て面をなす掛口端部には同心円の当具痕が見られるが、同様な竈形土器は大阪府池島・福万寺遺跡（文献5）、大県遺跡（第6図33、文献50）など生駒西麓に出土例があり、金雲母を含む胎土の特徴からしても、この地域からもたらされた可能性が高い。

一方、県北部の中国山地では、吉井川・旭川・高梁川上流域の7遺跡で29点の竈形土器が知られている。早くから竈形土器が採用された山陰地域と接することもある。良好な資料が多い。旭川の支流を望む丘陵上に営まれた真庭市惣台遺跡の竈形土器（第3図6）は、大形の土坑から6世紀後半の土師器甕とともに出土した。基底径70cmの円錐台形をしていて、台形に開けられた焚口の周りに庇を貼り付ける。鏡野町九番丁場遺跡は吉井川上流の段丘上に営まれた6世紀後半にはじまる集落である。7世紀前半の土坑から出土した竈形土器（第3図5）は、掛け口径15cm、器高22cmと小ぶりで、原尾島遺跡例のように焚口上部にのみ庇を貼り付ける。九番丁場遺跡から吉井川を9kmほどさかのぼった鏡野町久田原遺跡では、7世紀前半の堅穴住居から竈形土器が出土している（第3図7）。ずんぐりした形で、分厚い基部から上方に向けて内面を粗く削り上げる。これと似た作りの竈形土器は、隣接する鏡野町夏栗遺跡から単独で出土しており（第3図8）、同様の製作手法をとる鳥取県側との繋がりが推測される（第6図34）。

このように1期の竈形土器は、器形・法量ともにバラエティーに富むが<sup>(3)</sup>、これは県北部・南西部に分布する掛け庇で把手を持たない山陰系、県南部に分布する掛け庇・曲げ庇で把手を持つ近畿系と、系譜の異なる竈形土器が併存することによる。このうち曲げ庇を持つ竈形土器について見ると、焚口の下端に短い脚を備えていたようだ。近畿では背面基部にも脚を持つものがあるが、県内では確認できない。近澤豊明が「裾あき」と表現するこの竈形土器は、近畿において曲げ庇を持つものに限られるとされるが（文献61）、7世紀前半の堅穴住居から出土した高松原古才遺跡の脚を持つ竈形土器（文献25）は掛け庇の可能性が高い。後述するように、2期の岡山県では脚を持つ掛け庇の竈形土器が盛行するが、その出現は1期までさかのぼる。

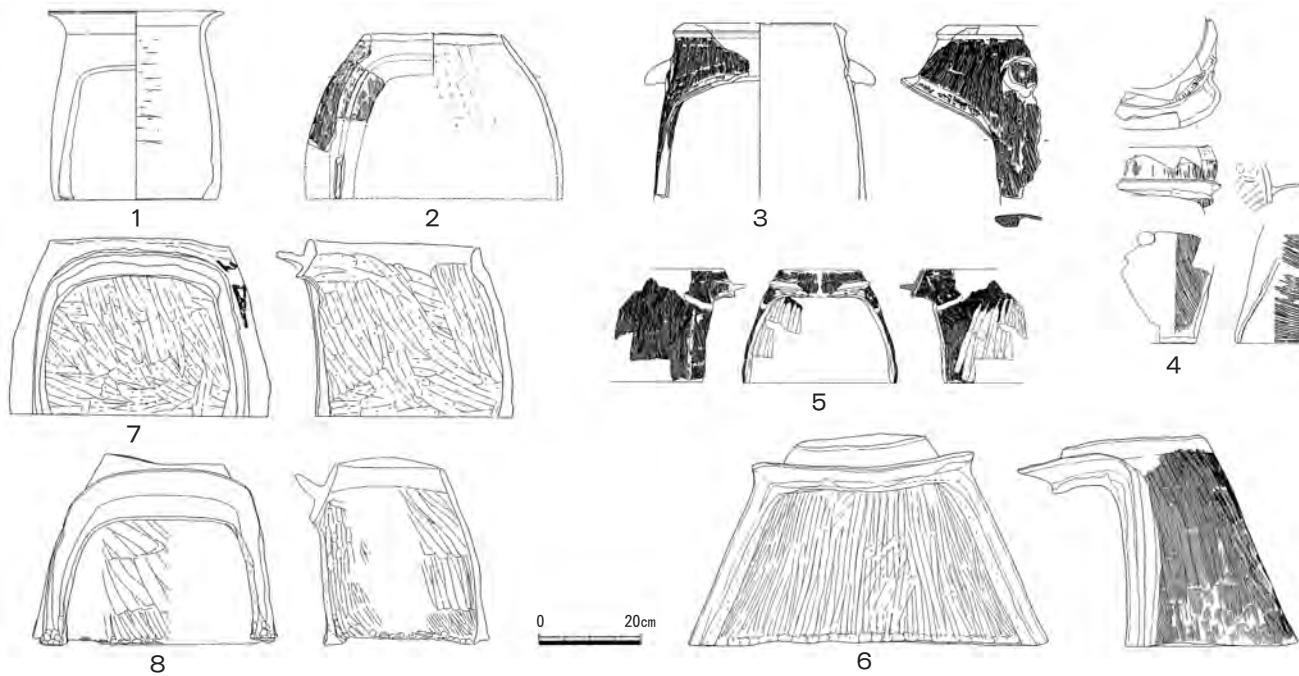
## 2期（7世紀後半～9世紀後半）

この時期の竈形土器は、県南部の31遺跡で83点が報告

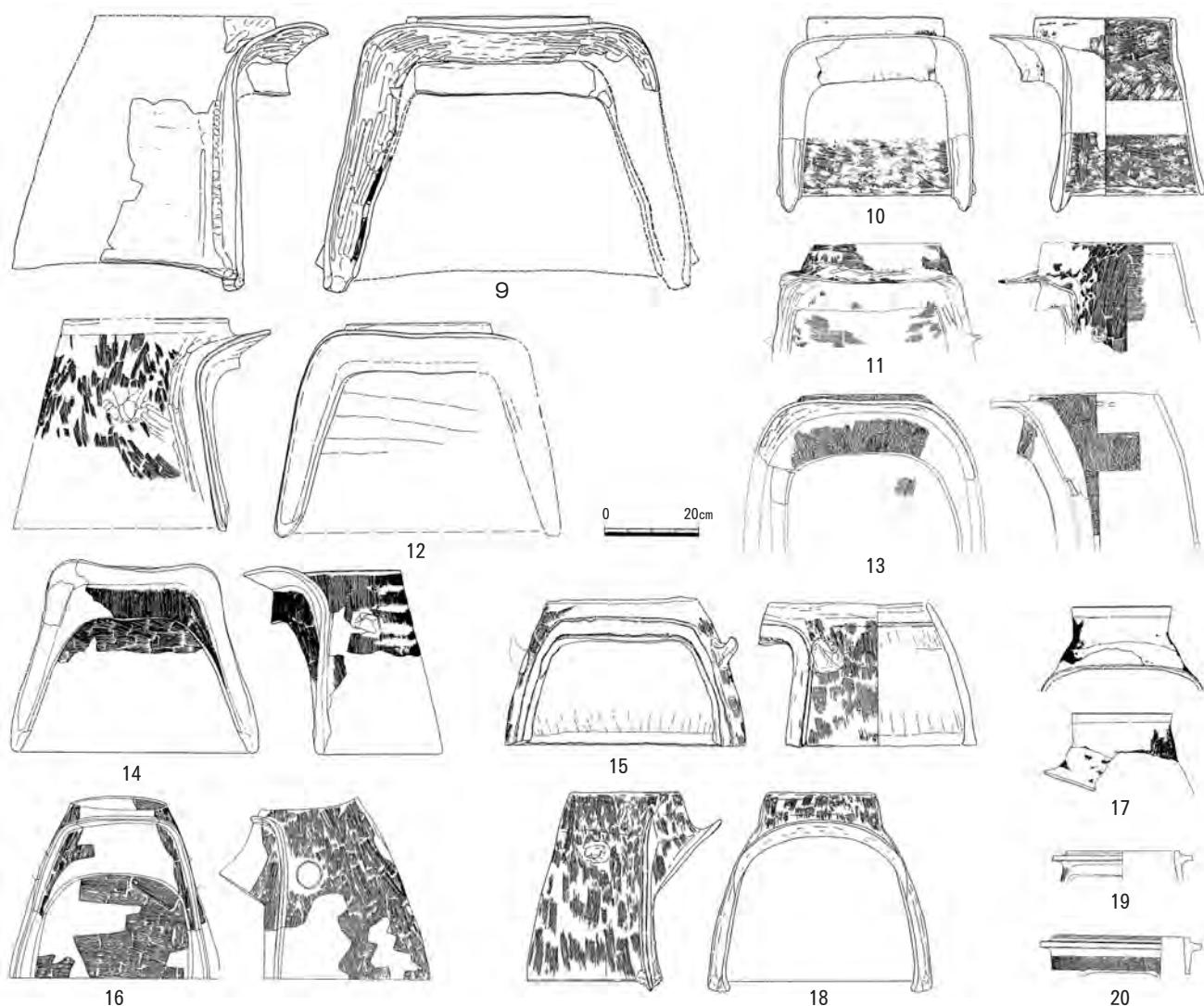
されているものの、県北部では1遺跡1点が確認できるにすぎない<sup>(4)</sup>。出土した遺跡は、寺院や官衙もしくはその関連遺跡が大半を占める。

津寺遺跡の西方丘陵に位置する岡山市前池内2号墳の横穴式石室から出土した竈形土器（第4図9）は、基底径82cm、器高58cmを測り、復元されたものとしては県内で最も大きい。焚口の周りに貼り付けた庇は幅広く、その下端を基底部より突出させて脚とする。把手の有無は不明である。「官」逆字が押印された蓋を伴う7世紀末の蔵骨器が出土しており、官人層の埋葬に関わる儀礼に用いられたものと思われる。8世紀の津寺遺跡では、南北120m、東西90mの範囲を築地で囲む官衙施設が営まれており、丹塗り土師器や円面硯、帶金具、瓦などが出土している。竈形土器は、区画外の土坑（8世紀前半）や西に接する河道（8世紀後半）からまとめて出土した（第4図10）。いずれも幅の広い付け庇を持ち、焚口の下端には脚を、体部の側面には横向きないし下向きの把手を備えている。吉井川下流域の瀬戸内市西谷遺跡は8世紀前半の須恵器製作工房と推定されているが、ここから出土した竈形土器（第4図15）は、基底径の割に器高の低い円錐台形を呈している。焚口周りの付け庇は脱落しているものの、その脇には上向きに貼り付けた角形の把手が残る。脚は有していない。ここから東へ約5km離れた備前市佐山東山窯跡群でも、須恵質に焼成された、付け庇で脚を持たない8世紀後半の竈形土器が見つかっている（文献45）。

阿智潟と呼ばれる内海に面した倉敷市菅生小学校裏山遺跡は、備中国府が置かれた総社平野に通じる港津としての役割を担っていたものと推定されている。7世紀後半～8世紀前半の土器とともに谷へ廃棄されていた竈形土器（第4図17）は下半を失っているが、焚口の上縁を折り曲げて庇とする。曲げ庇の竈形土器は、ほかに高松原古才遺跡でも知られている（第4図18）。焚口の側面に貼り付けた突帯下端を基部から突出させ脚とするが、これは、滋賀県大通寺C-1号墳例（第6図35、文献6）や大阪府難波宮跡下層例（第6図36、文献66）の内面に見られる支柱状の突帯と同じ役割を果たすもので、愛知県江古山遺跡に類例（第6図37、文献64）がある。方形に区画された官衙施設と見られる赤磐市斎富遺跡の竈形土器（第4図16）は、焚口部分を損じているが、その周



第3図 1期の竈形土器 (1/15)



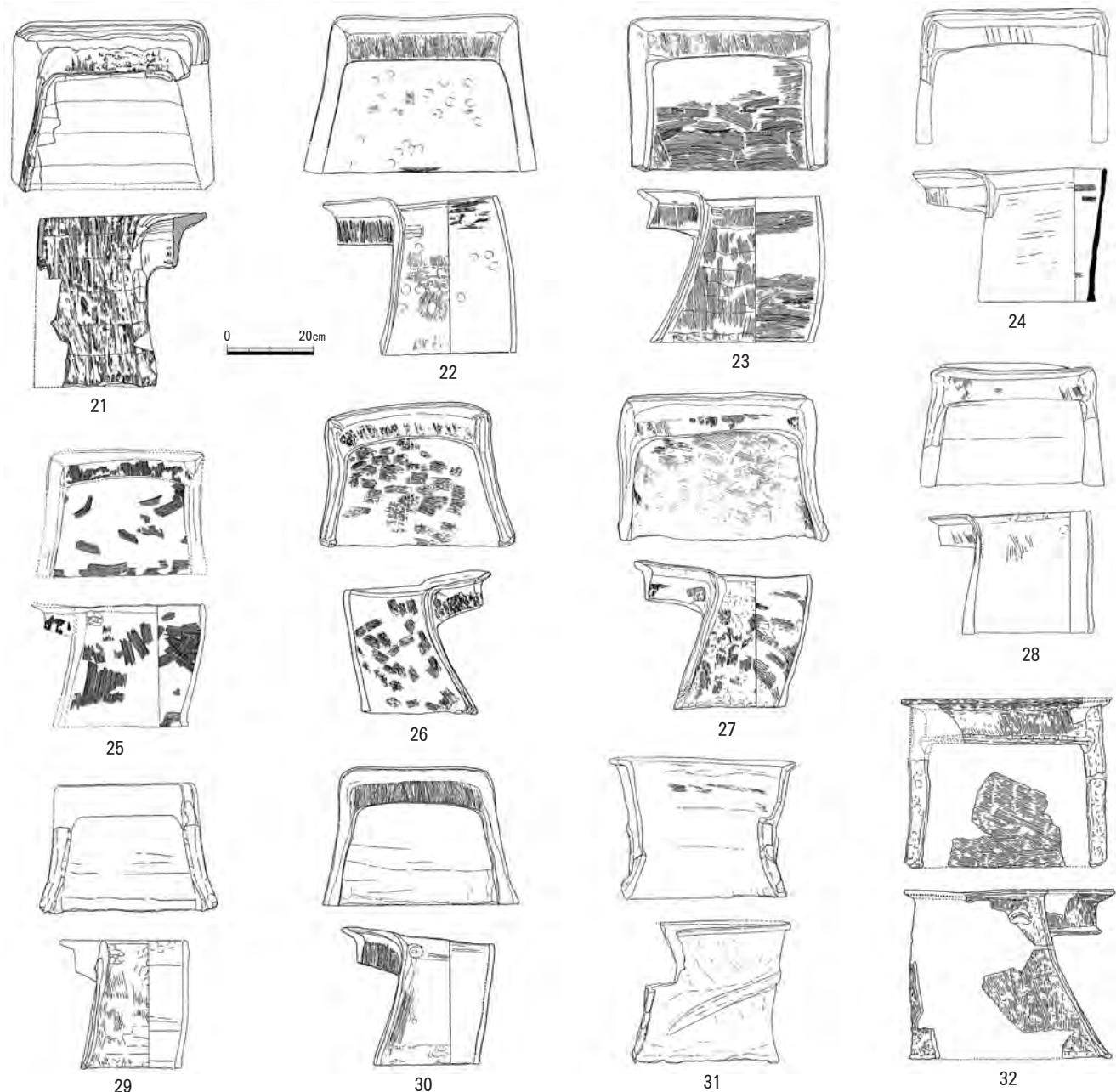
第4図 2期の竈形土器 (1/15)

りに断面矩形の突帯を貼り付ける。掛け口が小さく、器が高い点で曲げ庇の竈形土器と類似する。

備前市長縄手遺跡は、美作国の国津とされた片上津と山陽道の藤野駅を結ぶ街道沿いに位置する。ここから出土した竈形土器（第4図19）は、掛け口の下に断面矩形の突帯をめぐらせた釜形をなし、筒形の体部を切り抜いて焚口を開けている。備前国府との関連が想定される岡山市南古市場遺跡にも同様の例（第4図20）がある。

このほか笠岡市大飛島遺跡では、付け庇を持つ竈形土器のミニチュアが、銅鏡、銅鈴、銅錢、帶金具、奈良三彩小壺などとともに出土している（文献49）。

2期の竈形土器は、法量において1期とさほど大きな違いはないが、脚を持たない付け庇の西谷遺跡・佐山東山窯跡例が分布する県南東部を除いて、幅広の付け庇に角状の把手、焚口下端の脚を有する形態が盛行する。このような竈形土器がこの地域独自に生み出されたものかどうか、脚を手がかりに検討すると、山陰や山陽西部、九州北部では類例を見出すことができず、わずかに香川県小山南谷遺跡（文献47）で脚を持つ8世紀前半の竈形土器を確認した。この竈形土器は付け庇と報告されており、これが確かであれば瀬戸内海を挟んで同様の竈形土器が用いられたことになる。しかし、岡山県では出土数



第5図 3期の竈形土器（1/15）

が多い点、またその使用が7世紀前半までさかのぼる点を考慮すると、分布の中心がこの地域にあることは間違いない。これらが寺院や官衙関連施設から多く出土していることからすれば、新しい土器様式の一部として普及したことも考えられる。なお、掛口に突帯をめぐらせる小型の竈形土器は、長岡京跡や平安京跡に類例があり（文献72）、簡略化された形態として新たに伝えられた可能性がある。

### 3期（10世紀前半～14世紀後半）

この時期の竈形土器は、46遺跡156点が知られている。県北部の津山市美作国府跡例（文献36）を除けば、全て県南部の集落・生産遺跡からの出土である。

津寺遺跡から北西へ1kmほど離れた津寺・丸田遺跡では、9世紀～14世紀の集落が展開する。10世紀前半の黒色土器を伴う竈形土器（第5図21）は、掛口径31cm、器高39cmのほぼ円筒形をしていて、コ字形をなす底の上縁は掛口に接して貼り付けられ、その断面はく字形を呈する。2期に見られた脚はもはや認められず、側面の把手も失われている。旭川支流の河口（岩間江）近くに営まれた岡山市百間川米田遺跡では、12～13世紀の井戸や土坑、河道などから竈形土器がまとまって出土している。形態は津寺・丸田遺跡例と似通っているものの、掛口径が37～39cmと拡大する一方、器高は29～36cmとわずかに

低くなっている。また、焚口の両脇に楕円形の低い突起を設けているが（第5図22・23・30）、このような竈形土器は岡山市中島遺跡（第5図29）・津島遺跡（第5図25）・鹿田遺跡（文献44）など旭川下流域の集落から出土しており、地域的な特色をなしている。また特異な例として、掛口が外折する竈形土器が百間川米田遺跡（第5図32）や鹿田遺跡（文献43）で見つかっている。焚口側方の付け庇は基部から掛け口に達し、焚口上縁の付け庇がそれを繋いでいる。薄手に作られた内外をハケ目で調整しており、鍋と類似した作りとなっている。このほか、総社市金井戸遺跡では、外折する掛け口を持ち、体部に横突帯を貼り付ける竈形土器（第5図31）が出土している。

このように3期の竈形土器は、円錐台形から円筒形の器形に変わり、その法量も掛け口径が拡大する一方で器高がわずかに低下する。また、コ字形に開けられた焚口の周りに貼り付けた底の出は短くなるとともに、前代に見られた脚や把手は失われる。このような竈形土器は10世紀前半に現れ、12世紀後半～14世紀前半を中心とした盛んに用いられている。その広がりについて見ると、広島県草戸千軒町遺跡（文献68）や兵庫県白鷺中学プール遺跡・周世入相遺跡（文献65）、香川県川津東山田遺跡（文献48）、大阪府五反島遺跡（文献58）、京都府平安京跡（文献70）などに類例があるが、その出土量は岡山県に比べ



第6図 他府県の竈形土器（1/15）

表1 岡山県から出土した主要な竈形土器

遺跡名	所在地	性格	出土遺構	法量(cm)			特徴			時期	図版	文献	
				掛口径	基部径	器高	掛口	庇	把手				
津寺遺跡	岡山市	集落	堅穴住居	33.7	32.3	37.3	外反		×	6世紀中葉	1	16	
窪木薬師遺跡	総社市	集落	堅穴住居	26.7			直	付庇		6世紀後半	2	11	
津寺遺跡	岡山市	集落	護岸	29.6			内折	曲庇	○	6世紀後半～7世紀後半	3	14	
原尾島遺跡	岡山市	集落	溝				直	上付庇	孔	5世紀後半～7世紀前半	4	24	
九番丁場遺跡	鏡野町	集落	土坑	15.4	30.3	22.3	直	上付庇	×	6世紀末	5	29	
惣台遺跡	真庭市	集落	段状遺構	25.1	70.6	41.6	直	付庇	×	6世紀後半	6	22	
桃山遺跡	真庭市	集落	土器溜まり	29.6	44.3	36.7	直	付庇		6世紀末～7世紀前半		8	
桃山遺跡	真庭市	集落	土器溜まり	25.6			直	付庇		6世紀末～7世紀前半		8	
夏栗遺跡	鏡野町	集落	土器溜まり	22.8	47.6	37.2	直	付庇	×	6世紀後半～7世紀前半	8	33	
久田原遺跡	鏡野町	集落	堅穴住居	35.0	51.3	34.8	直	付庇	×	7世紀前半	7	31	
前池内2号墳	岡山市	墳墓	石室	38.0	82.0	58.0	直	付庇	○	7世紀末～8世紀初	9	12	
津寺遺跡	岡山市	官衙	土坑	28.7	41.5	38.0	直	付庇	○	8世紀前半	10	20	
津寺遺跡	岡山市	官衙	土坑			37.8	一	付庇	上向	○	8世紀前半		20
津寺遺跡	岡山市	官衙	包含層	25.6			直		横向	8世紀前半		20	
吉野口遺跡	岡山市	集落	溝	26.6			直	付庇	横向	8世紀前半	11	38	
吉野口遺跡	岡山市	集落	溝	29.8		44.7	直	付庇	横向	8世紀前半	12	38	
川入・中撫川遺跡	岡山市	官衙	斜面	26.0			直	付庇	上向	8世紀～9世紀	13	40	
菅生小学校裏山遺跡	倉敷市	官衙	谷	26.2	47.7	40.1	直	付庇	上向	○	7世紀後半～10世紀	14	10
西谷遺跡	瀬戸内市	生産	土坑	33.5	51.4	30.3	直	付庇	上向	×	8世紀前半	15	46
斎富遺跡	赤磐市	官衙	包含層	18.8	43.0	38.5	直	付庇	○	8世紀？	16	17	
菅生小学校裏山遺跡	倉敷市	官衙	谷	20.7			直	曲庇		7世紀後半～8世紀前半	17	10	
高松原古才遺跡	岡山市	集落	土器溜まり	22.5	48.0	42.2	直	曲庇	下向	○	8世紀中葉	18	23
津寺遺跡	岡山市	河川	河道	27.6			直		下向		8世紀後半～9世紀前半		13
津寺遺跡	岡山市	河川	河道	30.0			直				8世紀後半～9世紀前半		13
津寺遺跡	岡山市	河川	河道	35.8	56.7	36.2	直	付庇	下向	○	8世紀後半～9世紀前半		13
津寺遺跡	岡山市	河川	河道	37.6	50.7	27.6	直				8世紀後半～9世紀前半		13
津寺遺跡	岡山市	河川	河道		45.5		直				8世紀後半～9世紀前半		13
長縄手遺跡	備前市	官衙	包含層	23.8			鍔	付庇	—	—	8世紀～	19	32
南古市場遺跡	岡山市	官衙	河道	27.2			鍔	×	—	—	9世紀	20	41
津寺・丸田遺跡	岡山市	集落	斜面	31.5		39.5	直	付庇	×	×	10世紀前半	21	13
吉野口遺跡	岡山市	集落	土坑	30.0			直	付庇			12世紀末		38
吉野口遺跡	岡山市	集落	土坑			31.2	直	付庇			12世紀末		38
百間川米田遺跡	岡山市	河川	河道	37.5	47.5	36.6	直	付庇	×	×	12世紀末～	22	28
百間川米田遺跡	岡山市	河川	河道	39.0	42.8	33.3	直	付庇	×	×	12世紀末～	23	28
天神河原遺跡	岡山市	集落	土坑			29.8	直	付庇	×	×	13世紀前半		35
鹿田遺跡	岡山市	集落	井戸	34.0	35.2	32.8	直	付庇	×	×	13世紀前半		42
百間川今谷遺跡	岡山市	集落	溝	38.1	45.5	34.3	直	付庇	×	×	13世紀後半	27	19
中島遺跡	岡山市	集落	土器溜まり	32.5		28.5	直	付庇			13世紀後半	28	35
津寺遺跡	岡山市	集落	土坑		38.3		直	付庇		×	13世紀後半		20
長良小田中遺跡	総社市	集落	土坑	39.4	38.6	30.9	直	付庇	×	×	13世紀末	24	59
津島遺跡	岡山市	集落	溝	37.4	35.8	28.6	直	付庇	×		13世紀	25	30
中島遺跡	岡山市	集落	土坑		34.7	29.5	直	付庇	×	×	13世紀	29	35
百間川米田遺跡	岡山市	集落	溝	30.3	38.5	29.3	直	付庇		×	13世紀	30	9
金井戸遺跡	総社市	集落	土坑	43.3	37.8	32.8	外折	付庇	×	×	13世紀	31	34
津寺遺跡	岡山市	集落	土坑	33.5	45.8	34.9	直	付庇	×	×	13世紀～14世紀	26	21
百間川米田遺跡	岡山市	河川	包含層	49.0		39.0	外折	付庇	×	×	8世紀～14世紀	32	28

てはるかに少ない。しかも、これらの中には焚口の脇に突起を設けるものがあり、この地域から運ばれたたことも考えられる。平安時代末～鎌倉時代にこの地域で盛んに用いられた吉備系土師器碗を共同飲食に伴う儀礼のうつわと仮定するならば（文献59）、竈形土器もまたそうした儀礼を演出した道具の一つであったのかもしれない。

しかし、これほど盛行した竈形土器も15世紀には姿を消す。

### 3 煮炊き具との関係

さて、こうした竈形土器の変化は、土師器の煮炊き具とどのような関わりがあるのか見ておきたい。

1期の煮炊き具には、球形ないし長胴形の胴部をもつ甕のほか、把手付甕、くびれた頸部へ粘土板を鍔状に貼り付けた釜や器高の浅い鍋、甑などがあるが、いずれも量的には少ない。6世紀の甕は、胴部が球形をなすものと長胴のものが見られる。後者には最大径が中位以下にあって下膨れ状をなすものもある。7世紀に入ると、胴部の張りは弱くなるが、最大径は依然として胴部中位にある。15~35cm（平均27cm）という竈形土器の掛口径は、こうした甕の法量に対応したものと考えられるが、器高27~32cm（平均30cm）を測る甕の中位が、器高22~41cm（平均35cm）を測る竈形土器の掛口にあるものと推定すると、その底部は20cmほどの高さにあることになる（第7図1期）。これは、竪穴住居の竈に残る支脚の高さ（平均16cm）と比べてやや高い。竈形土器においても、甕に合わせて掛口に粘土を巻き、甕の底を石で支えるなどして使用したことも考えられる。

2期の煮炊き具の構成は、1期とさほどかわらないが、球形の甕は姿を消し、甑は須恵質のものが多くなる。8世紀の甕は、口縁部が水平に引き出されるようになり、口径は張りを失って砲弾形をなす胴部の最大径を凌駕するようになる。このため、甕の口縁部が竈形土器の掛口（平均径28cm）に掛かることになり、その底は1期よりも低く位置する。これを実際の資料で検討すると、2期の竈形土器の器高は23~58cm（平均39cm）、甕の器高は21~32cm（平均28cm）であるから、甕の底は竈形土器の基部から10数cmの高さに置かれることになるが（第7図2期）、これは竈における支脚の高さとほぼ等しい。

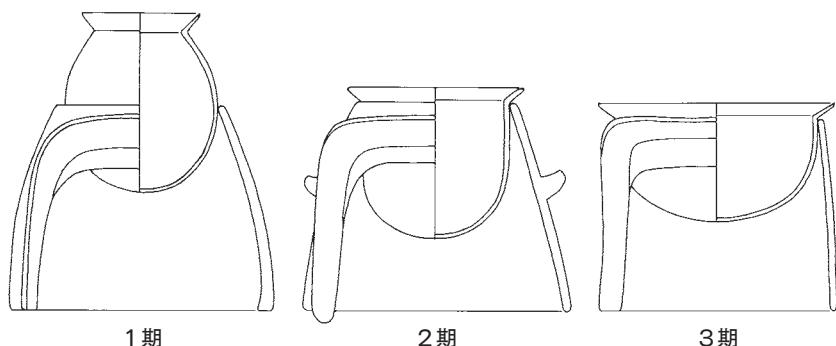
3期には、把手付甕や釜、甑などは姿を消し、煮炊き具は甕（鍋）に限定される。甕は10世紀頃から短胴化が進み、12世紀には口径の1/2まで器高が低くなつて鍋へと変化する（文献73）。それとともに拡大した口径は

30cmを超えるようになり、40cm以上になるものも見受けられる。こうした変化は、甑の消滅が端的に示すように、甕に沸かした湯を利用して米を蒸す調理法（強飯）から鍋を使って米を直接煮炊きする調理法（姫飯）へと変わったことが大きな原因と考えられる。竈形土器における掛け口径の拡大（平均37cm）と器高の低下（平均33cm）は、こうした鍋の盛行に対応した結果であろう（第7図3期）。実際、赤磐市三蔵畠遺跡（文献56）や岡山市三手向原遺跡（文献39）では、鍋と竈形土器が同時に焼成されていて、両者の密接な関係がうかがえる。

#### 4 竈形土器の役割

次に、竈形土器の出土状況から、その役割を検討したい。鳥取県における竈形土器を出土した竪穴住居の割合は、八橋第8・9遺跡で23軒中7軒、上種第6遺跡で17軒中4軒、百塚第5遺跡で17軒中1軒と報告されている（文献51）。これに対し岡山県では、竪穴住居から見つかった例はごく少なく、津寺遺跡で131軒中4軒、窪木薬師遺跡で35軒中2軒、久田原遺跡で16軒中1軒にすぎない。これらはもちろん住居廃絶後に廃棄されたものであり、住居における保有率をただちに示すものではないが、山陰に比べて竈形土器の使用が低調であったことは間違いない。1期でも古相の竈形土器を出土した津寺遺跡や窪木薬師遺跡の竪穴住居は、いずれも一辺7mを超える大型に属する。このことは、竈の保有率が低い県北部にあっても一辺7mを超える大型住居では竈を持つ割合が高いこととも符合し、竈及び竈形土器は有力世帯が保有・管理する特別な存在であったようだ。この津寺遺跡と窪木薬師遺跡の竈形土器は、いずれも竈に近い竪穴の隅から出土しており、ここが保管場所であった可能性がある。久田原遺跡でも、一辺6mを測る竪穴住居の隅から、土

師器の甕を内部に納めた竈形土器が見つかっているが、その焚口は住居の壁に向けられており、保管状態にあったことを示している。北に接する夏栗遺跡では、集落中央のくぼみからほぼ完形の竈形土器が出土していて、屋外での共同使用が想定される。真庭市桃山遺跡（文献8）でも、10mほどの範



第7図 竈形土器と煮炊き具

囲に竈形土器や土師器の甕、土製支脚が焼土をまじえて散在する状況が報告されている。こうした状況からすると竈形土器は、有力世帯を中心に集落単位で行われた儀礼における屋外炊事の道具と考えられる。ただし、使用痕が顕著でないことからすると、短期間のうちに廃棄されたようだ。なお、近畿地方では横穴式石室にミニチュアの竈形土器を副葬する風習が認められるが、県内では今のところ知られていない<sup>(5)</sup>。

2期の出土例の大半を占める、赤磐市備前国分寺跡（文献1・2）のような寺院や赤磐市馬屋遺跡（文献15）、斎富遺跡、津寺遺跡、菅生小学校裏山遺跡といった官衙では、土坑や河道に廃棄された状態で見つかる例が多い。また、前池内2号墳のように、埋葬に関わる儀礼での使用が推定されているものもある。ところでこの時期には、住まいが堅穴住居から掘立柱建物へと移行するが、これに伴って、竈が竈形土器へ転換されたという考えがある。確かに竈形土器の出土量は1期の62点から2期の84点へと増加しているように見えるが<sup>(6)</sup>、住居ごとに造り付けられた竈に代わるものとしてはあまりにも少ない。6世紀前半の火山噴火で埋もれた群馬県黒井峯遺跡（文献55）では竈を設けた平地住居が確認されており、掘立柱建物においても引き続き竈が使用された可能性は高い。稻田孝司は奈良時代の文書に見える金属製の釜から、狩野敏次は平安時代初頭に成立した「日本靈異記」の記述から、掘立柱建物や礎石建物における竈の使用を推定する（文献3・52）。また、平安時代末以降の絵巻物では屋内に築かれた竈を確認できる。いずれにしても、出土量の少ない竈形土器が、竈に代わって日常的な炊飯に用いられたとは考えにくく、稻田が指摘するように、特別な用途を想定すべきであろう（文献3）。

3期の竈形土器は、屋敷の一画に設けられた井戸や土坑に投棄される例が見られるようになる。1・2期に比べると煤の付着が顕著で、頻繁に使用された様子がうかがえる。この時期には三足鍋も見受けられるが、口径30cm以下のものが多く、竈形土器と組み合う鍋より小さい。竈形土器が祭事などの共同炊事に使用されたと仮定すれば、三足鍋は各戸で行われた炊事の道具と言えるのかもしれない。15世紀に入ると、竈形土器は県内で確認できなくなる<sup>(7)</sup>。このころには、12世紀後半～13世紀前半に開かれた多くの集落が衰退し、居館を中心とする新た

な集落が形成される。食器においても儀礼に多用された楕形土器が消滅し、瓦質の煮炊き具が新たに登場するなど大きな変化を生じている。竈形土器が、こうした瓦質土器の焜炉・風炉や金属製の竈に置き換えられた可能性もあるが、集落の再編によって地縁的な紐帶が失われ、竈形土器を使用する習俗が廃れたことも考えられる。

## 5 結語

竈形土器の集成・検討は、山陰や四国的一部すでに行われており（文献4・51・62・74）、その間に位置する山陽の様相はこれらを結び付けて理解する鍵になるものと思われた。そのため当初は、広島県を含めた集成を企図したが<sup>(8)</sup>、時間の制約もありかなわなかった。

しかし今回の作業を通して、この地域の竈形土器は寺院や官衙、流通の拠点となるような集落とその周辺など、ごく限られた遺跡から出土することが改めて確認できた。これは、竈形土器を使用する習俗が、他地域と交流を持つ一部の集団（機関）の間で行われたことを示すものであろう。またその形態は、2期と3期に大きな変化を遂げていることも明らかとなった。これは、煮炊き具（炊飯方法）への対応が原因の一つと考えられるが、斉一的な形態が広範に普及した理由については別の説明が必要となる。さらに、3期の竈形土器は近県でほとんど知られておらず、わずかに広島県や兵庫県、香川県などで数例を確認するにとどまった。古代末には竈形土器を用いなくなる地域が多い中、岡山県において中世まで使い続けたのはなぜなのか、今後検討すべき課題である。

なお本稿では、紙数の関係から、竈形土器の集成表を大幅に割愛せざるを得なかった。他日の公表を期したい。

## 註

- (1) 移動式竈、置き竈、竈形土製品などとも呼ばれるが、本稿では学史を尊重してこの名称を用いる。
- (2) 朝鮮半島では竈形土器の遺例が少なく、竈をもとに日本国内で案出したものと想定されている（文献63）。
- (3) 体部に突帯をめぐらす竈形土器は、離接する兵庫県や香川県、島根県、鳥取県では知られているものの、岡山県では今のところ確認できない。
- (4) 山陰における竈形土器の使用は中国山地よりも長く、9世紀まで認められる（文献4・51）。

- (5) 県北部の中国山地では、土師器の甕や甑といった炊飯具の副葬が認められる（文献18）。
- (6) 1期と2期の時間幅を考慮すると、出土数が増加したとは言い難い。
- (7) 岡山市中島遺跡、総社市総社遺跡、井原市川面館跡、笠岡市園井土井遺跡、新見市田治部氏館跡、真庭市赤野遺跡・植木遺跡・谷尻遺跡赤茂地区、鏡野町久田堀ノ内遺跡といった15～16世紀の居館跡において、竈形土器の出土は知られていない。
- (8) 文献71に掲載された広島県の竈形土器出土遺跡一覧表には6遺跡があげられている。

## 文献

- 1 赤磐市教育委員会2011「備前国分寺跡2」『赤磐市文化財調査報告』5
- 2 赤磐市教育委員会2015「備前国分寺跡3」『赤磐市文化財調査報告』8
- 3 稲田孝司1978「忌の竈と王権」『考古学研究』97 考古学研究会
- 4 岩橋孝典2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について—土製支脚・移動式竈を中心として—」『古代文化研究』11 島根県古代文化センター
- 5 江浦 洋1991「池島・福万寺遺跡出土の移動式竈—釜穴に同心円文圧痕を有する移動式竈に関する予察—」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要-89-1～6調査区の概要-』大阪文化財センター
- 6 大津市教育委員会2011「埋蔵文化財発掘調査集報V」『大津市埋蔵文化財調査報告書』53
- 7 岡山県教育委員会1975「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8
- 8 岡山県教育委員会1976「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12
- 9 岡山県教育委員会1982「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52
- 10 岡山県教育委員会1993「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81
- 11 岡山県教育委員会1993「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86
- 12 岡山県教育委員会1994「前池内古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89
- 13 岡山県教育委員会1994「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90
- 14 岡山県教育委員会1995「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98
- 15 岡山県教育委員会1995「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99
- 16 岡山県教育委員会1996「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104
- 17 岡山県教育委員会1996「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105
- 18 岡山県教育委員会1996「西大沢古墳群・畠ノ平古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111
- 19 岡山県教育委員会1996「百間川今谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114
- 20 岡山県教育委員会1997「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116
- 21 岡山県教育委員会1998「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127
- 22 岡山県教育委員会1999「惣台遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136
- 23 岡山県教育委員会1999「高松原古才遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138
- 24 岡山県教育委員会1999「原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139
- 25 岡山県教育委員会1999「高松原古才遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』143
- 26 岡山県教育委員会2000「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150
- 27 岡山県教育委員会2001「三須河原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156
- 28 岡山県教育委員会2002「百間川米田遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164
- 29 岡山県教育委員会2002「九番丁場遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』165
- 30 岡山県教育委員会2003「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173
- 31 岡山県教育委員会2004「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184
- 32 岡山県教育委員会2005「長繩手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』189

- 33 岡山県教育委員会2005「夏栗遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』194
- 34 岡山県教育委員会2007「金井戸遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209
- 35 岡山県教育委員会2009「中島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』221
- 36 岡山県教育委員会2011「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』228
- 37 岡山県教育委員会2019「刑部遺跡・神明遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』249
- 38 岡山市教育委員会1997「吉野口遺跡」
- 39 岡山市教育委員会2001「三手向原遺跡」
- 40 岡山市教育委員会2006「川入・中撫川遺跡」
- 41 岡山市教育委員会2012「南古市場遺跡」
- 42 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1988「鹿田遺跡1」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』3
- 43 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2007「鹿田遺跡5」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』23
- 44 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター2017「鹿田遺跡10」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』32
- 45 岡山理科大学考古学研究室2017「佐山東山窯跡群第6次発掘調査概報」
- 46 長船町教育委員会1985「西谷遺跡」
- 47 香川県教育委員会1997「小山・南谷遺跡I」『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- 48 香川県教育委員会2001「川津東山田遺跡I区」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』38
- 49 笠岡市教育委員会2010「大飛島の遺跡と砂州」
- 50 柏原市教育委員会1985「太平寺・安堂遺跡」『柏原市所在遺跡発掘調査概報 1984年度』
- 51 加藤裕一2005「移動式竈について」『名和中畠遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター
- 52 狩野敏次2004「かまど」『ものと人間の文化史』法政大学出版局
- 53 倉敷考古館1979「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』14
- 54 倉敷市教育委員会2011「広江・浜遺跡」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告』14
- 55 子持村教育委員会1991「黒井峯遺跡発掘調査報告書」『子持村文化財調査報告書』11
- 56 山陽町教育委員会1976「三歳畠遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発用地内埋蔵文化財発掘調査概要』6
- 57 庄原市教育委員会1993「則清1・2号遺跡」『庄原市文化財調査報告書』1
- 58 吹田市教育委員会2016「五反島遺跡発掘調査報告書」
- 59 鈴木康之2002「中世土器の象徴性—「かりそめ」の器としてのかわらけー」『日本考古学』14 日本考古学協会
- 60 総社市教育委員会2011「長良小田中遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』22
- 61 近澤豊明1992「竈形土製品について」『長岡京古代論叢II』中山修一先生喜寿記念事業会
- 62 椿 徹1999「古墳時代の竈形土器について—豊浦町高野遺跡の出土例を中心として—」『高野遺跡（北地区）』山口県教育財団
- 63 寺井 誠2016「新たなものを生み出す渡来文化」『河内の開発と渡来人』大阪府立狭山池博物館
- 64 豊田市教育委員会2013「江古山遺跡調査報告書」
- 65 中村信義1990「竈形土器考」『今里幾次先生古希記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論文集刊行会
- 66 難波宮址顕彰会1965「難波宮址の研究」研究予察報告第五
- 67 広島県教育委員会1981「松ヶ迫遺跡群発掘調査報告」
- 68 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1994「草戸千軒町遺跡発掘調査報告II」
- 69 広島県埋蔵文化財調査センター1993「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告II」『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書』114
- 70 平安京調査会1975「平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊—」
- 71 埋蔵文化財研究会1992「古墳時代の竈を考える」『第32回埋蔵文化財研究集会資料集』
- 72 三好美穂1996「都城の煮炊具—藤原京・平城京・長岡京・平安京—」『古代の土器研究—律令土器様式の西・東4 煮炊具—』古代の土器研究会
- 73 山本悦世1997「岡山県南部における土師器鍋の変遷」『鹿田遺跡4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 74 渡邊淳子2003「讃岐における古代移動式竈について」『四国学院大学構内遺跡発掘調査報告書』善通寺市教育委員会